

グラナダ大聖堂におけるアロンソ・カーノの《無原罪の御宿り》 —聖母像と譜面台の関係性をめぐって—

名原宏明（早稲田大学）

アロンソ・カーノ（Alonso Cano, 1601-1667）はスペインを代表する 17 世紀の画家、彫刻家、建築家である。彼はセビーリャやマドリッドなどで活躍した後、晩年に故郷のグラナダに戻り、大聖堂における絵画や彫刻作品の制作活動、ファサードの設計に従事した。その中で、後のスペインの芸術家に大きな影響を与えたのが、1655 年から 1656 年にかけて制作され、現在グラナダ大聖堂聖具室に保管されている《無原罪の御宿り》の彫刻である。このカーノの聖母像は、マリアの縦長の菱形、すなわち、紡錘形の輪郭によって、スペインにおける「無原罪の御宿り」の図像の新たな規範となっていた。

アロンソ・カーノの《無原罪の御宿り》の聖母像は、グラナダ大聖堂聖歌隊が用いていた譜面台の上部のケースに置かれるために制作された。この譜面台もカーノ自身によって設計された典礼用具で、彼の建築設計において頻繁に見られる意匠や装飾を含んでいる。そのため、従来の研究では、紡錘形の輪郭で表され、螺旋状の動きのある青いマントに包まれた聖母像の垂直的な性格が、四方から見上げられる譜面台の上部という位置において、より一層強調されようとしていたのではないかと考えられていた。絵画、彫刻、建築に精通し、祭壇衝立の設計も行っていたカーノの芸術では、しばしば、このような、異なる芸術形態の要素を相互に作用させて、全体で垂直的な効果を創出するという特徴が見られる。

発表者も、垂直性の強調が目指されたという従来の研究の指摘に賛同するが、同時に、アロンソ・カーノはこの譜面台全体で、聖母マリアの「無原罪の御宿り」の概念を表そうとしていたのではないかと考えている。

グラナダ大聖堂の《無原罪の御宿り》の彫刻は、マリアの紡錘形の輪郭や青いマントのひだの処理などにおいて、その前後の年代に位置づけられるカーノの同主題の絵画作品と非常に類似している。そのような彼の絵画は、17 世紀に確立していく「無原罪の御宿り」の図像に従っているが、下部の旧約由来の要素を伴う風景表現を省き、花を持った天使たちで雲間に浮かぶマリアを称えているという点で特徴的である。そして、カーノは大聖堂の譜面台においても、幼い天使の装飾を計画していた。つまり、彼は自らの絵画における単純化された構図を、紡錘形の輪郭の聖母像や天使の装飾を通して、譜面台にも取り入れようとしていたのである。さらに、聖母像を収めるケースや磔刑像、聖歌隊の本を載せる板などの譜面台のその他の装飾もまた、「無原罪の御宿り」の神学的な議論と関連し、当時のグラナダにおいてこのマリアの御宿りの問題がいかに重要であったのかを示していると考えられる。そのため、アロンソ・カーノは、絵画で表現するように、譜面台を一つのキャンバスに見立て、上部の《無原罪の御宿り》の聖母像を天使やその他の装飾で補完し、全体で聖母マリアの汚れない御宿りの奇跡を表そうとしていたのだと理解できるのである。